

二、最近にいたる敦煌学者、ないし禅宗史学者の研究成果を十分に踏まえつつ、新資料によってさらにオリジナルな見解が示されていることである。

三、本書は、タイトルは文献研究となっているが、論及するところはきわめて広く、禅宗はもとより、天台・華嚴・密教から道教におよび、単なる文献学的業績でないことである。この点、本書は、現段階において望み得る最高水準の敦煌禅宗研究と言って過言でないであろう。

中国における

仏教・哲学・宗教の新刊書

岡部 和雄

中国における出版活動はなかなか盛んである。以前はほとんど見かけることの少なかった仏教や宗教についての新刊書が、何冊も書店の棚に並ぶようになった。啓蒙的な本がやはり多いが、かなりガッチリした学術書もある。宗教については定期刊行物も創刊され内容豊富である。敦煌に関する論文集がつつぎ

ただ望蜀の言を述べれば、このような敦煌文献の基礎的な研究の上に立って、敦煌禅宗文献全体にわたる総合的体系的研究所、新資料に基づく初期禅宗通史の完成を、今後に残された課題として期待したい。著者のいっそうの精進を祈るとともに、禅の最高学府としての本学の内外における学的地位を名実ともに高めた労著として、本書の刊行を喜びたい。

（大東出版社、昭和五八年二月二〇日発行、A5判、七〇三頁、一五、九〇〇円）

ぎに三冊も出版された。無神論の系譜を探究する本も出されるが、仏教史の研究・出版にも目を見はらせるものがある。網羅的系統的に紹介することなどとてもできないが、私が購入して手許に置いてある新刊書をアトランダムに採りあげ、若干のコメントを加えることにしたい。台湾についてはふれない。

『中国仏教史』第一巻 任継愈主編、中国

社会科学出版社（北京）、一九八一年九月刊。主編者の任継愈（一九一六―）は哲学、仏教学の第一人者。現在、中国社会科学院研究生院教授で、世界宗教研究所所長の要職にある。この第一巻の執筆者は任継愈、揚曾文、劉蘇、黄心川（附録の印度仏教哲学を担当）である。この巻は東漢（日本では後漢という）三国時代の仏教史を扱っているが、全体は五章より成る。

第一章 仏教伝来以前の秦漢時代における中国社会で流行した宗教迷信と方術

第二章 仏教の中国伝来

第三章 東漢・三国時代の仏教

第四章 東漢時代に漢訳された主要經典の

分析

第五章 三国時代に漢訳された主要經典の

分析

各章は二節から七節に区別され、各節には多数の項が立てられている。序一八頁、本文四五八頁、附録四五九―五七一頁、索引五七二―五七九頁。

本書執筆の基本的立場や全八巻の構成などについては主編者の「序」に詳述されている。（なおこの「序」は「仏教と中国の思想

文化」の表題で『世界宗教研究』一九八一年第一期、二月刊に掲載された。それは本書の刊行より七ヶ月も前である)

中国史における封建社会の時代に仏教はその上部構造の一部として発展したとし、漢から唐にかけての封建前期と、宋から清にかけての封建後期に大別できるとする。仏教はこのように封建社会の経済発展や政治闘争と密接不可分の関係を有するから、上部構造としての仏教思想だけをそれらから切り離して採りあげるのは、仏教史の眞の解明にはならないという。中国革命後三十年たったが、いまだ中国仏教全体の通史がかかれていない。そこで難解な仏教の概念や術語を現代の社会科学の用語で説明し、弁証唯物主義と歴史唯物主義によって中国仏教史を分析し論評するつもりであるという。そこで『中国仏教史』全八巻の構成はつぎのようになるとする。

- 第一巻 東漢・三国……………
- 第二巻 晋・南北朝
- 第三巻 封建社会前期の仏教
- 第四巻 隋・唐……………
- 第五巻 ……………
- 第六巻 宋・元・明・清…………… 封建社会後期の仏教
- 第七巻 ……………

中国における仏教・哲学・宗教の新刊書(岡部)

第八巻 清末・民初…………… 封建社会解体期の仏教

なお、唐中期以降の仏教史には、チベット仏教の叙述を加えなければならぬ。チベット仏教は中国仏教史の一部であり、そこにその特色と意義があると考えるからと付言している。

また第一巻しか出ていないが、第二巻以降の叙述の基調もこれと一貫したものとなることは疑いない。漢から唐にかけての仏教についてはすでに『漢唐仏教思想論集』(一九六三年初版、七三年増訂再版)が著わされており、大綱は変わることはないであろう。しかし通史としてのダイナミックな叙述の中で、どのような肉付けが新たにされるか、最近二十年の研究がどんな形でもりこまれていくか興味ぶかい。

なお任継愈教授に師事し、二年間の北京留学から帰った丘山新氏が「現代中国における仏教研究」(『春秋』八二年十二月号)の中で、教授の人となりや研究の近況を伝えている。参照されんことを望む。

『中国哲学史論』 仁継愈著、上海人民出版社、一九八一年六月刊。著者の中国哲学史に

関する旧稿四十一篇(一篇を除き文革以前にかかれた)を集め、「中国哲学史を学んで三十年―序に代えて」と「後記」を加えたもの。数多い仏教関係の論稿は故意に省かれている。著者の師であった湯用彤(一九六四年没)の追悼文も収められている。哲学史の基本問題、老子・荘子の研究、魏晉の清談などを扱った論稿が並び、哲学史家としての著者の面目躍如たるものがある。なお、仁継愈主編の『中国哲学史』(全七冊、既刊四冊、人民出版社、一九六三年)が続刊中である。

『隋唐仏教史稿』 湯用彤論著集第二巻、中華書局(北京)、一九八二年八月刊。湯用彤(一九三三―一九六四)はその『漢魏兩晉南北朝仏教史』によって日本でも広く知られている。かれの子息である湯一介(一九二七―)が父の旧著や未刊の旧稿を整理して上記のシリーズを刊行しはじめた。『隋唐仏教史稿』は一九三〇年代における北京大学での講義録を底本としたものという。

- 第一章 隋唐仏教勢力の消長
- 第二章 隋唐伝説の事情
- 第三章 隋唐仏教の撰述
- 第四章 隋唐の宗派

第五章 隋唐仏教の伝布

の五章をもって本文（二二三二頁）とし、「隋唐仏教大事年表」「五代宋元明仏教事略」を附録（二二三—三一二頁）とする。なおこの「湯用彤論著集」というシリーズは全六巻からなり、つぎのような内容のものといわれる。

- 1、『漢魏両晋南北朝仏教史』
- 2、『隋唐仏教史稿』
- 3、『湯用彤學術論文集』（『魏晋玄学論稿』『往日雜稿』『康復札記』を収録）
- 4、『印度哲学史略』
- 5、『魏晋玄学講義』
- 6、『飯釘札記』

なおこれらの他に『高僧伝校釈』という未定稿が残されているが、これについては湯一介が手を入れて完成させ、『中国仏教典籍選刊』という別のシリーズの一冊として刊行する予定といわれる。いずれにしても湯用彤の従来あまり知られなかった著作までふくめて出版されることは喜ばしいことである。

『魏晋南北朝仏教論叢』方立天著、中華書局、一九八二年四月刊。著者の方立天（一九三三—）は中国人民大学哲学系講師。本書

には著者が六十年代以来、各誌に発表した十篇の論稿が収められている。巻頭の「道安評伝」をはじめとする八篇はいずれも魏晋南北朝時代の仏教（支遁、慧遠、僧肇、竺道生、梁武帝、魏晋玄学など）について論じたものである。附録の二篇は隋唐諸宗の成立問題や中国哲学史における仏教の影響などを扱っている。本文二四〇頁、附録二四一—二八六頁、索引二八七—三〇八頁。いずれの論稿にも著者の歴史唯物主義の立場が貫かれているが、とくに仏教の果たした功罪について鋭い分析が見られる。

『隋唐仏教』郭朋著、齊魯書社、一九八〇

年三月刊。郭朋は世界宗教研究所に属する中堅の仏教研究者らしい。本文六四二頁からなる本書は上下の二篇に分けられ、上篇では隋代仏教、下篇では唐代仏教がテーマとされている。隋王朝や唐王朝と仏教との関係がそれぞれ採りあげられ、時の支配者たちが仏教に對してどのような政策をもって臨んだかが具体的に分析されている。著者が政治と宗教の問題に格別な関心を寄せていたことがうかがわれる。全体として通史的な叙述であり、隋唐諸宗のそれぞれに節を分けて論述を進め

ているが、そのためもあってかやや平板に流れた嫌いがある。

『宋元仏教』郭朋著、福建人民出版社、一九八一年八月刊。前述の『隋唐仏教』の続篇として書かれた。本文二〇五頁。宋代仏教、元代仏教を分けて叙述するが、とくに後者の叙述は簡略である。前著と同様、宗派を中心とした通史の体裁をとっている。本書に続いて一九八二年一月には『明清仏教』が刊行された。本文三四〇頁。この三部作をもって隋唐、宋元、明清の各仏教が通観できることになった。

『中国仏教思想資料選編』第一巻、中華書局、一九八一年六月刊。編者は石峻、楼宇烈、方立天、許抗生、楽寿明であるが、楼宇烈（一九三四—、北京大学助教）が実質的責任者らしい。編者は北京大、中国人民大学、安徽大の哲学系教官たちである。この第一巻には魏晋南北朝期の主要な仏教思想について概観が得られるよう仏教文献の原文が収められ、その著者についての簡単な紹介が添えられている。すなわち牟子『理惑論』から顔之推『歸心篇』までこの時代を代表する中国人

の著作が網羅されている。配列は年代順。初学者や他の研究領域の専門家が、浩瀚な仏教文献を渉猟しなくとも手軽に必要な原文を参照できるよう配慮されており、中国仏教思想に関する選文集（読本）としても利用価値が高いと思われる。なおこのシリーズは全四巻十冊になるよう編集され、第二巻が隋唐時代、第三巻が宋・元・明・清・近代、第四巻が仏教経論訳本選となる予定という。

『中国仏学源流略講』 呂澂著、中華書局、

一九七九年八月刊。呂澂は民国時代から活躍している著名な仏教学者のひとりであるが、革命後も『仏教大百科辞典』（セイロンで計画された Encyclopaedia of Buddhism in English）の中国代表編纂主任をつとめた。

また中国仏教協会の機関誌『現代仏学』にも盛んに寄稿した。一九六一年以来、中国科学院哲学社会科学部の委託をうけ五年にわたって仏学研究班を組織したが、本書は研究班での講義を整理編集したものの、「仏学の初伝」から「南北朝禅学の流行」までの九講に、序論と余論を附している。本文二七三頁。なお附録（二七六―三九六頁）として「四十二章経抄出の年代」ほか十三項目が加えられてい

るが、そのほとんどは『現代仏学』に掲載したものの。「宋代仏教」の一項は前述の『仏教大百科辞典』用として書かれた。呂澂の仏教史叙述は全体として旧来の研究方法を踏襲しており、日本の研究などもよく参照している。しかし仏教各宗の盛衰をそれ自身の展開として叙述するにとどまり、その社会的・階級的根源にまで立ち入った分析を施していないと批判されている。それにもかかわらず、呂澂の旧稿をまとめて本書が出版されたのは、その実証的研究に学術的価値を認めたからだろうか。

『中国仏教』第一輯、中国仏教協会編、知識出版社（北京）、一九八〇年四月刊。巻頭に趙朴初の「前言」を収める。それによれば、本書に収められた論稿はいずれも二十

以前に執筆されたもので、それは前述の『仏教大百科辞典』の項目として当時の仏教学者が分担してまとめたものという。内容は中国仏教史略（十七節）、「中外仏教関係史略」（十節）、「中国仏教宗派源流」（二十八節）の三節からなるが、いずれも『百科辞典』の原稿そのままに署名入りである。呂澂は「唐代仏教」「五代仏教」「宋代仏教」（これは『中国

仏学源流略講』所収のものとはほぼ同文）を担当している。ほかに黄懺華、游俠、林子青、法尊、高観如、田光烈、虞愚、観空などの名が見える。『仏教大百科辞典』そのものは今のところ完成の見込みがないから、せめてこんな形ででも公刊されることが望ましい。四百篇あまりの原稿が残っているらしいから、本書の第二輯、第三輯が続いて刊行されることを期待したい。本文三九四頁。

『唐代仏教』 范文瀾著、人民出版社（北京）、

一九七九年四月刊。范文瀾（一八九一―一九六九）は著名な歴史学者。革命以前に延安でかかれた『中国通史簡編』（上・中、一九四一）、『中国近代史』（上編、一九四七）は画期的名著の誉れたかい。のちに中国科学院副院長となり、中国歴史学界に指導的役割を果たしたことはよく知られている。本書に収める「仏教各宗派」「禅宗―中国士大夫の好みに合った仏教」の二篇は『中国通史簡編』第三編第二冊から採ったものである。また「唐代仏教（引言）」は雑誌『新建設』（第十期、一九六五年）に発表されたものの転載である。本文九〇頁。なお附録（九一―三〇頁）とされた「隋唐五代仏教大事年表」は張

遼瀋の手にかかるもので、五八一年（開皇一）から九五九年（顯徳六）にわたる詳細な仏教史年表である。

敦煌研究は世界的に盛んであるが、中国でも近年三つの論文集が刊行された。いずれも仏教研究と直接関わる点は少ないが、紹介するに値すると思われる。

『敦煌研究文集』敦煌文物研究所編、甘肅人民出版社、一九八二年三月刊。敦煌学の各領域にわたる十三篇の論稿が収められている。仏教と関係の深いものは賀世哲の「敦煌莫高窟北朝石窟と禅観」、李永宁の「報恩経と莫高窟壁画中の報恩経変相」、孫修身の「莫高窟仏教史迹故事画の紹介」などであろう。本文三三八三頁、図版七七頁。

『敦煌変文論文集』周紹良・白化文編、上下二冊、上海古籍出版社、一九八二年四月刊。本書は革命以前から今日までの変文関係論文を網羅したもの。上冊には王国維「敦煌発見唐朝の通俗詩および通俗小説」をはじめとする二十六篇、下冊には陳寅恪「敦煌本△維摩詰経文殊師利問疾品演義△跋」をはじめとする三十一篇の論稿が収められている。

また巻末に「ソ連所蔵の仏経故事五種」を関係資料として附録とする。上下冊で本文八八〇頁。

『敦煌吐魯番文献研究論文集』北京大学中国中古史研究中心編、中華書局、一九八二年五月刊。周一良の「序言」に続き、王重民「敦煌写本跋文」をはじめとする十七篇の論稿を収める。仏教関係の論稿は見当らないようである。本文六八六頁。

哲学史や思想史の出版もなかなか盛んである。これらの中に仏教思想がどう位置づけられているか興味を持たれる。ここにとりあげたのはそれらのほんの一部にすぎない。

『中国哲学』中国哲学編輯部編、三聯書店（北京）、一九七九年八月創刊。不定期刊行の哲学雑誌。現在までに第八輯が刊行された。主編者は包遵信、委員に孔繁、沈芝盈、陳金生、龐朴、金春峰、張義徳、樓宇烈がいる。国内の学者の論稿のみならず、外国人学者の論稿が翻訳・紹介されることもある（例えば島田虔次（京大）、Th. de Bary（ロンドンピア大））。大学院生にも誌面を提供している。仏

教関係の論稿もしばしば掲載される。前述した湯用彤の『隋唐仏教史稿』は最初は本誌に連載されたものである。

『中国哲学史』北京大学哲学系中国哲学史教研室編写、上下二冊、中華書局、一九八〇年三月・七月刊。本書は北京大学で哲学を専攻する学部学生の参考書としてかかれた。本書が成るについても樓宇烈の功績が大である。仏教に関しては「第三篇 封建制前期唯物主義と唯心主義の闘争（漢—唐）」（上冊）において集中的に論じられている。本文（上）四一四頁、（下）四四八頁。

『中国思想史綱』侯外廬主編、上下二冊、中国青年出版社（北京）、一九八〇年五月—八一年一〇月刊。侯外廬（一九〇三—）は『中国思想通史』（全五巻六冊、一九五六年—六〇年刊）の主編者として日本でもよく知られている。本書はその『通史』を補訂し、大綱を示したものである。本書でも「第二編 中国封建制社会前期の思想」「第三編 中国封建制社会後期第一段階の思想」（いずれも上冊）において仏教思想が如上にのせられている。本文（上）三四六頁、（下）三七九頁。

宗教研究の分野でも、世界宗教研究所が中心となって定期刊行物、辞書、研究書などを出版している。「中国無神論思想論文集」湯敬昭編、江蘇人捧民出版社、一九八〇年二月刊や『中国古代宗教初探』朱天順著、上海人民出版社、一九八二年七月刊などがあるが、ここでは辞書と宗教雑誌をとりあげて紹介することにしたい。

『宗教詞典』宗教詞典編輯委員会編、任継愈主編、上海辞書出版社、一九八一年一月刊。委員会は主編者を入れて十四名、執筆者は丁漢儒をはじめとする四十八名。ただし各項目は無署名である。本文一、一六八頁、索引など二八〇頁。ハンディーな中辞典といったところ。発行部数(初版)は二七、〇〇〇部。刊行の理由と経緯についてつぎのようにいう。社会主義の文化を發展させ各種の活動を遂行するには、宗教に対する理解が必要になり、そのために本書がつけられた。宗教に関する基本的知識を紹介するが、それは科学的で実事求是の精神にもとづいて行なう。本書は社会科学研究の活動家、大学・専門学校・研究生院(日本の大学院)の教師と学生、および各方面の実際活動家たちのために

編纂された。本書は中国社会科学院世界宗教研究所に属する北京、上海、四川、雲南、内蒙古、甘肅、吉林、新疆等の地区の同志が編集・執筆した。七八年に着手し八一年のはじめに原稿ができたという。

収録された項目は六、七一九項目を数えるが、これはつぎの十類に分類できる。

一、宗教一般(「宗教」など71)*以下のアラビア数字は項目数をあらわす。

二、有史以前の宗教・原始宗教(「史前宗教」など48)

三、古代宗教(中国45、エジプト40、ギリシア・ローマ126、その他67)

四、仏教(a、教派・組織・機構188、b、人物493、教義683、d、経籍書文等419、e、歴史事項24、f、仏・菩薩・鬼神・諸天175、g、教判・教職308、h、儀礼・節

日137、i、古迹・寺院・その他187)計2,614

五、キリスト教(a、教派・組織・機構280、b、人物479、c、教義・神学163、d、経籍書文225、e、歴史事項120、f、

聖書の人物と詞彙89、g、教判・教職110、h、儀礼・節日78、i、教堂・聖地等34)計1,578

六、イスラム教(a、教派・組織・機構

105、b、人物117、c、経注と教義127、d、歴史事項61、e、コーランの人物と伝説79、f、教判・教職78、g、信仰・儀礼・節日等17、h、寺院・聖地その他64)計648

七、道教(a、教派・組織・機構30、b、人物163、c、経籍書文176、d、神仙110、e、方術、修煉等94、f、称谓・儀式・規

戒・節日84、g、仙境・名山・宮觀51)計708

八、中国の少数民族の宗教(222)

九、中国の民間宗教(45)

十、その他の宗教(a、ユダヤ教31、b、ゾロアスター教43、c、マニ教32、d、インド教144、e、ジャイナ教18、f、シ

ク教24、g、神道106)計390

比較的短期間で作製した、いわば実用的な辞書であり、学術的な価値がとくに高いとは思われないが、中国の各地方に在住する世界

宗教研究所所属研究者が協力分担して執筆した点は評価されるべきであろう。道教、少数民族の宗教、民間宗教に関する諸項目には、

この辞書ならではの充実した新知識がもたれている。儒教は古代宗教の中国の部に分類され、仏教や道教などと並ぶ「宗教」とは見な

されていないことも注目に値する。

『世界宗教研究』（編集）世界宗教研究編輯部、中国社会科学出版社（北京）、一九八〇年創刊（季刊）。世界宗教研究所の定期刊行物の一つで、八三年二月現在で通巻一一号を数える。体裁はB五版・横組、一六〇頁前後

り、それによれば論文一篇の分量は一万字以内（印刷して七―九頁）であること、ペンネームを用いてもよいこと、略略を付すること、必要な注記や参考文献をつけること、掲載分については稿料を支払うことが明記されている。発行部数は大体五、〇〇〇―六、〇〇〇部。

に属する研究所の一つで、一九六四年に創設された。七八年以来、任継愈が所長である。研究所には仏教研究室、儒教研究室、道教研究室、キリスト教研究室、イスラム研究室があり、また日本の大学院に相当する研究生院が附属している。『世界宗教研究』のほかに『世界宗教資料』も刊行されている。

で、毎号一五編前後の論文・調査研究・学術資料が掲載されている。この雑誌は世界の諸宗教に関する学術誌であるが、具体的には、

所載論文を宗教別に見ると、例えば八一年第二期のものでは論文総数十五篇のうち、仏教十篇、道教一篇、シャーマニズム一篇、少数民族の宗教一篇、イスラム教一篇、マルクス主義宗教論一篇となっている。八二年第三期のものでは論文総数十篇のうち、仏教六篇、マニ教二篇、有史以前の宗教一篇、宗教・無神論と自然科学一篇である。仏教を扱った論文がとくに多いのは、仏教の研究者の層が厚いということであろうか。それとも仏教の唯心主義を批判することが中国のマルクス主義哲学にとって重要な課題になっているのであろうか。『宗教詞典』の全項目のうちの約四割が仏教の項目であることを考えあわせると、中国の宗教における仏教の比重が依然として大きいと判断しても大過ないように思われる。

〔補遺〕
『《壇經》對勘』郭朋（編）、齊魯書社（濟南）、一九八一年六月刊。編者の郭朋は前述の『隋唐仏教』『宋元仏教』『明清仏教』の著者。世界宗教研究所で中国仏教を研究している。法海品（敦煌本）、惠昕本、契嵩本、宗宝本の四本を五七節に分けて對勘している。宇井伯寿、鈴木大拙等の研究を参酌しているが、最近の諸研究（ヤンポルスキーの『英訳壇經』、『六祖壇經諸本集成』〔柳田聖山主編『禅学叢書』所収〕、駒沢大学禅宗史研究会編著『慧能研究』）は参照されていない。本文一六七頁、附録一六八―一七八頁。六千部以上も刷られた本書の読者はどのような人たちなのであろうか。近く『壇經校釈』（中国仏教典籍選刊、中華書局）も刊行されるらしい。

世界諸国の宗教について、その理論・歴史・現状・聖典・人物・宗派などの問題を採りあげ、併せて科学的無神論とマルクス主義の宗教原理問題を扱っている。購読者としては国内・国外の哲学、宗教学、民族学、歴史学、文学、考古学などの研究者、および高等院校文科の教師と学生を想定している。内外の宗教研究の成果を誌面によく反映させ、学術交流を進展させるために、つぎの四原則にもとづき百家争鳴の方針を貫く。①論文は執筆者の責任において書くこと、②論文は一定の学術的水準をもったものであること、③論文は執筆者の研究成果にもとづくものであること、④論文には編輯部の意見を加えないこと。また具体的な投稿規定が設けられてお

なお、世界宗教研究所は、中国社会科学